低学年でもっと漢字を

森岡：学年ごとに教える字が決まっていまして、小学校では四年生がいちばん重くなっているのですが、それはむしろ一年生の方に重点を置いて教える方がいいということはお考えですか。

石井：ええ。実は昭和36年に、私は『私の漢字教室』という本を刊行してそれまでの実験を報告したのですが、その後も文部省に低学年ほどいいということを進言してきました。それで指導要領の改訂のたびに漢字学習の山が低学年の力に寄ってきてはいます。しかしこれは、文部省のある方から聞いた話ですが、現場からのものすごい反対があって、容易なことではないということです。

鈴木：亡くなられた時実利彦先生のお話では、空間認識が先に発達し、時間認識は遅れて発達するということです。ですから当然幼児にとって図式認識はやさしく、数字であるとか時間であるとかは難しいわけです。昨日と今日と明日、ましてあさってなどというのはどうしても子どもは理解することができない。本当を言うと、一、二、三、四という数字などというのは、時間の系列になるので、よくわかるようになるのは十歳頃からだということです。その頃になってようやく抽象的な思考が可能になってくるわけです。空間認識が非常に発達するときに、しかも記憶力がいいときに漢字をたくさん教えるのは、脳生理学から見ても合っているのです。日本における戦後教育の間違いは、小学一年に社会科だとか理科を教え、国語の時間を少なくしたことだと思います。中国は低学年ほど教える漢字の数は多いのでしたね。

石井：ええ、そうです。

鈴木：350 くらいをいっぺんに教えますね。そして上に行くほど少なくなっている。この方がずっと脳生理学から言えば合理的だと、時実先生はおっしゃっています。

スチュアート：しかし、中国はいまどんどん略字になってきているでしょう。

石井：そうなんですよ。たとえば大事な偏を取り去って、それで簡略化したとしているけれども、それではその漢字の意味の手がかり

を失うことになってしまいます。私は愚劣な行為だと思いますね。

スチュアート：アメリカで漢字を教えている例をお出しになりましたけれども、もし漢字がお話のような役割を持つのであれば、漢字を守る日本の役目はたいへん大きいことになりますね。(笑)

石井：おそらく中国の人たちは中国の古典が読めなくなると思いますね。

鈴木：最近日本のおっちょこちょいが、中国の略字に日本の漢字を合わせようとする運動をやり始めていますが、これは問題ですね。